

ALAK 2011 大会報告

田口悦男 (大東文化大学)

2011年11月12日にソウル国立大学 (Seoul National University) で ALAK (The Applied Linguistics Association of Korea) の年次大会が開催されました。ALAK は応用言語学を科学的な学問として研究すべく、1978年に設立された由緒ある学会です。今大会のテーマは *Cognition and Practice in Applied Linguistics* で、会場となったソウル国立大学は、ソウル郊外の起伏に富んだ丘の上にあり、当日は天気にも恵まれ、基調講演や発表など内容の濃い素晴らしい大会となりました。

招待講演者は青山学院大学の世界的に著名な応用言語学者 Peter Robinson 氏、University of Maryland の Nan Jiang 氏と JACET より派遣された私の3名でした。Peter Robinson 氏、Nan Jiang 氏は共に優れた業績をお持ちの著名な研究者であり、私もこの日は学生に戻った気持ちでいろいろ勉強いたしました。Peter Robinson 氏の演題は”Task Complexity, Task Sequencing, and Task-based Second Language Learning”で、この講演では 1) 現実世界に見られる第二言語で行う課題の複雑さをどのように測定するのか、2) この複雑さの度合いの情報をもとにどのように学習者に教育的課題を順序立ててデザインするのか、3) このような課題により生ずるコミュニケーション上の認知的負荷が第二言語の運用面の正確さ、複雑さ、そして流暢さにどのような影響を与えるのか、4) このような認知的負荷が言語習得にどのような影響を与えるのかを探ることでした。大会のテーマにふさわしい、素晴らしい基調講演でした。

Nan Jiang 氏の講演は外国語学習者が屈折形態素を習得する場合の心理言語学的モデルを提唱するものでした。その概要は、第二言語の形態素を習得する際に、学習者の母語に対応する形態素がある形態素(*congruent morphemes*)の場合には、母語の習得過程においてその形態素の意味の活性化はすでに確立されており、そのため第二言語での形態素の習得が可能であり、また容易でもある。しかし、学習者の母語に対応する形態素がない形態素(*incongruent morphemes*)の場合には、当然のことながら、母語の習得過程においてその形態素の意味の活性化が行われることはないため、習得が難しく、さらに臨界期の制約により習得が一層困難になるというものでした。例えば、英語の名詞の複数形を示す形態素の習得に関しては、スペイン語とロシア語の母語話者にとって、それぞれ複数であることを示す文法マーカ―が母語に存在するため、その形態素の習得は容易であるが、一方、韓国語や中国語の母語話者には対応する文法マーカ―が母語に存在しないため、その習得は難しいというものです。この仮説を検証するにあたって、Nan Jiang 氏の研究グループは英語の上級レベルの運用能力を有するロシア語の母語話者と中国語の母語話者を対象に、それぞれのグループの母語と共通の第二言語である英語の、2つの言語条件のもとで、文と絵のマッチングテストを行い、その反応速度を調べました。

例えば、*The arrow is pointing to the blue shirt.* という文（母語、あるいは英語で提示）とシャツが描かれた絵を学習者に提示して読んでもらいます。シャツが描かれた絵には2つのバージョンが用意されており、一つの絵には一枚のシャツが、別の絵には複数枚のシャツが描かれています。単数、複数を文法的に区別するロシア語においてはこの複数枚のシャツの絵に対しては文法的に正しくないため、文法的に正しい一枚のシャツの絵を提示されたときよりも反応速度が遅れると考えられます。実験の結果、母語条件下では、中国語母語話者は単数、複数のどちらの絵を文と共に提示されてもその反応速度に大きな変化はなかったのに対し、ロシア語の母語話者は文と絵の単数、複数のミスマッチに関しては反応速度が遅れました。第二言語の英語についても各母語グループにおいて母語と同様の現象が観察されました。つまり、中国語母語話者グループに比べて単数、複数を区別するロシア語の母語話者は第二言語の英語においてもミスマッチを認識したため反応時間が長くかかったのです。このように、Nan Jiang 氏は屈折形態素の習得における母語の転移の現象を説明する心理言語学的モデルを提唱していましたが、大変興味深い、刺激的な講演内容でした。

私は繰り返し読み (*repeated reading*, Samuels, 1979) という方法を通じて読みの流暢さと理解度の関係について解明を試みて来ましたが、1997 年以降今日までの一連の研究の概観と今後の課題について講演をいたしました。単語認知などの読みの下位スキルが発達するにつれ、読みの理解度も高まるとする自動化理論 (*Automaticity Theory*, LaBerge & Samuels, 1974) に基づき、その理論をその提唱者 Samuels 自ら教育実践に具体化した *repeated reading* の効果を検証しています。英語母語話者を対象としてこれまで多くの研究が行われて、*repeated reading* の効果についてはかなり認知されている第一言語（英語母語話者）の読みの研究とは対照的に、第二言語における読みの研究においては下位スキルの発達と理解度の関係については未解明の部分が多く残っています。

昼食をはさんだ午後の部では4つの同時進行の発表セッション (*Concurrent Sessions*) と *Poster Session* が行われました。*Concurrent Sessions* は *Applied Linguistics & Second Language Education*, *Second Language Acquisition I*, 及び *II*, そして *Teaching Methodology & Material Development* の4つのテーマで、音声習得、文法教授、イマージョン教育等の多様なトピックに関して研究発表が行われ、発表後の質疑応答も活発でした。私の参加したイマージョンプログラムにおける文法教授に関する発表を一例として紹介いたします。So-Eun Cho 氏 (*Hankuk University of Foreign Studies*) は "Meaning-Focused vs. Form-Focused: An Observation of Language Course in a Korean Immersion Camp" と題する発表で、*project-based learning (PBL)* を活用した文法教授がどのように実際には行われているのかを明らかにしようとしていました。ビデオカメラで教授活動や学習者や教師の間で行われた *interaction* のデータを撮影し、分析する質的アプローチを用いておりました。データ収集は、アメリカでもっとも有名なイマージョン・キャンプ・プログラムである *Concordia Language Villages* の中の *Korean Language Village* で、1名の韓国語教師と5名

の高校生から成る韓国語学習グループの、4週間にわたる学習活動を研究対象としました。研究から明らかになったことは、教授する文法項目を学習者に提示し、その文法形式をコミュニケーション的な文脈で使用例を確認し、また、実際に自分たちのキャンプ生活で使用しながら習得していく過程が具体的データにより示されておりました。

私の韓国滞在中は、ALAKの関係者の方々に大変お世話になりました。韓国訪問は私にとっては初めてで、大変不安でしたが、ALAKのご配慮により、ソウル国立大学の大学院生に Incheon 国際空港に出迎えを受け、宿泊施設まで案内していただきました。また、ALAKの主催するランチや大会終了後のパーティにもお招きいただき、暖かいもてなしを受けました。ALAKの皆様のご配慮に心よりお礼申し上げます。また、貴重な機会を与えてくださいました JACET の国際交流委員会の皆様にも厚くお礼申し上げます。今後も JACET と ALAK との益々活発で実り多い交流が行われることを心より願ってご報告を終えたいと思います。

References

- LaBerge, D. & Samuels, S. J. (1974). Toward a theory of automatic information processing in reading. *Cognitive Psychology*, 6, 293-323.
- Samuels, S. J. (1979). The method of repeated readings. *The Reading Teacher*, 32, 403-408.